

## 彫刻創造交流発信プロジェクトワークショップ 第1回

「どうやったら彫刻という財産をまちづくりに活かせるか？」

### 開催概要

日時 12月2日 13時30分～15時30分

場所：ときわ湖水ホール アートギャラリー

参加人数：38名

インプットレクチャー・ファシリテーター：藤原徹平（横浜国立大学 准教授）

コメンテーター：日沼禎子（女子美術大学 教授）

・ワークショップの初めに、「UBE ビエンナーレ（現代日本彫刻展）を考える会」提言書の内容を振り返った。提言書では「教育」「観光」「普及」「広報」の4項目における総合的な充実化を重視し、市民が楽しめるビエンナーレになることを目標とすべきと結んでいる。

・次に、藤原氏、日沼氏より AIR（アーティストレジデンス）部門や彫刻教育など、提言書以降の UBE ビエンナーレの改革内容を紹介。

・次に宇部市のみならず、中心市街地の空洞化や、ネットショッピングによる街の使われ方の今後の劇的な変化など、街づくりにおける課題を藤原氏より紹介。

・後半はワールドカフェ形式でのワークショップを開催

テーマ1：「愛される彫刻とは何か？」

各自5分間考えた内容をグループごとに全員発表、ディスカッションの上で、各グループの代表者が発表を行った。

彫刻の街ならではの多様な視点からの彫刻が市民に愛されるための視点が提示された。

目立った内容1：子供（遊び）

子供のほうが彫刻に対して積極的によじ登ったりくぐったりと積極的なコミュニケーションがある。「遊べる」「触れられる」というようなことが、彫刻が子供から愛される存在になる上で重要であり、子供から愛されることが市民からの愛着に大きな影響があると言えそうである。

目立った内容2：風景と彫刻（自然環境との調和）

自然環境の中で印象を変える、光りの当たり方で違って見えるなど、地域の原風景の一部になるような彫刻。四季の変化と調和する彫刻などいくつかグルーピング可能なキーワードが出た

目立った内容3：彫刻が愛してくれる

彫刻と人との双方向性の関係性について指摘があった。彫刻清掃に関わった彫刻を愛してしまうなど、関係性をつくることがいかに重要かがわかる

目立った内容4：分かりやすさ、ユーモア（具体性+ユーモア）

具体的で分かりやすいもの、目立つもの。また単にわかりやすいだけでなくユーモアがあ

るもの。そういったものが市民から愛されていることがよくわかった。

目立った内容 5：多義的な印象がもてる彫刻

ものすごく分かりやすいものだけでなく、それとは逆に、観る人それぞれが、いろいろな想いを想起するような多義的な解釈がおきるような彫刻も、人の心に残るものであるという指摘があった。蟻の城などはその代表例かもしれない

テーマ 2：「彫刻と宇部の街は、どんなところにどんな風につながっていったらよいのか？」

各自 15 分間考えた内容をグループごとに全員発表、ディスカッションの上で、各グループの代表者が発表を行った。

宇部の街にどのように彫刻を配置・発信していくべきなのか、自由な解釈から様々な提案があった。

主な意見 1：市街地の配置が「点在」しすぎている。市街地のどこかにもっとまとまって彫刻を置いて、見所をつくってほしい。

主な意見 2：真締川沿いの彫刻をもっとうまく展示してほしい。緑が鬱蒼として彫刻が見えない。

主な意見 3：作家との交流の場をもっとほしい

主な意見 4：学校教育の場にもっとおいてほしい

主な意見 5：宇部にしかできない彫刻の歴史になるようなもっと大きなことをやってほしい

主な意見 6：「大賞」作品をならべて、宇部にしかできない鑑賞空間をつくってほしい

主な意見 7：各校区の人が集まる場所をもっと彫刻を展示してほしい。

今回のワークショップではテーマ 2 で出た具体的なアイデアの内、いくつかのアイデアを起点に、彫刻の創造交流発信案を作成して持参し、これについてテーブルごとにわかれて意見交換を行う形を検討している。